

私にとってふれコンは音楽の原点です

横山 マリア

私にとってふれコンとは、それぞれが置かれている環境や問題や違いを越えて、互いを輝かせあいながらひとつの音楽を協働創造すること。

Q ふれこんとの出会い

2011年、山梨に移住してすぐに私は身体を壊していました。ある日、あるお母さんから支援学校に通うお子さんの詩を手渡されました。その詩を用いて音楽を作ってふれコンに応募したいとの事でした。すっかり音楽から離れていた私でしたが、その詩に目を通してみると、実にユニークで日常の雑踏の中では味わえない景色、飾りけのない躍動感が飛び込んできました。紙面から今にも踊り出しそうな文字達にはすでに音とリズムが備わっていて、デコボコだけど心地よい抑揚はちゃんとメロディになっていたのです。頭をひねり作る作曲とは根本的に違う音楽の誕生に本当に驚きました。これで良いのか不安の中、平成14年ふれコンに応募したのがはじまりでした。



この時もう一曲、聴覚障がいの少女の書いた詩『音色』を歌うことになりました。いつも私と音楽を作って下さる作曲家藤原秀次郎さんの作品です。～どうして私は聞こえないの?～とはじまる詩は衝撃的でした。音の無い世界は想像すらできなかった。しかし、悲しみが追いつかないほど美しい曲が完成しました。私は彼女の喜ぶ顔が見たくて当日を迎えたのですが、やっと会えたその瞬間気づきました。この歌を彼女は聞くことができない事、歌うことさえ。当たり前が当たり前ではないこの世界にショックを覚えた事を今も忘れません。浮かれていた自分を少し恥じ

たりもしました。～聞こえない私は嫌い」と歌う『音色』～私には声が見えると歌う『音色』本番の舞台。スポットライトをあびて歌う私と隣で手話をする彼女を横目で見た時、不思議な感覚に包まれたのです。彼女は聞こえないはずの私の歌にあわせキラキラ顔を輝かせこう歌っていました。～私は聞こえない私が好き。この日2人で歌いあげた『音色』を忘れません。私はあなた。あなたは私。歌手名利に尽きます。音楽を通じて、善や犠牲や葛藤をさらりと越えてただそこにあつた愛にすっぽり包まれた体験でした。魂が揺さぶられるような体験が出来たふれコンはまさに私の音楽の原点なのです。



Q ふれコン それから

ふれコンは、私が病んでいる事が言い訳にならないくらいアクティブで多様な個性の集まりで才能を持ち寄り真っ白な白紙の状態から音楽を積みあげてゆきます。はじめの頃は、私でよければ何かお役に立てればと上から目線で参加していたかもしれませんが。しかし気づけば本気で音楽と向き合いながら私自身が 元気をもらい、多様性やいのちの大切さに気づき、音楽のもつ意味を深く模索しはじめていました。その想いがだんだんと膨らんで気づけば各地でふれこんの歌を歌いはじめていました。余談ですが北海道コンサートでのこと。主催者から前例三列はすべて聴覚障がいを持つ方々を招待したとの事を聞かされました。聞こえないけどそこで私の歌をじっと見つめている方々へ海を渡り『音色』を届けにやって来たのだと実感しました。～私は聞こえないあなたが好きと歌う『音色』。音楽は人と人を結ぶ。ふれコンで学んだことです。おこがましくもサポートする側だと思っていた私がいっつも沢山のパワーをもらって助けられていた。それがふれコンの凄さです。



Q 今回の作品『生きる』について

前にも述べましたが彼らの詩に心をすましているとその文字には音とリズムがあり、また詩の行間に彼らが見て感じている景色が観え隠れしてゆきます。たまには尖って刺さる言葉もありますが丁寧に磨きをかけてゆきます。私がすることは彼らの詩からこぼれ落ちてしまいがちな内面の声や葛藤に耳を傾け丁寧に音として紡いでいく。ただそれだけかもしれません。

毎回、沢山の詩の応募作品の中から直感的に詩を選んでおりますが今回の作品『生きる』もすぐに決めました。後から気づいたのですが前回の『月明かり』と同じ作詞者の進藤学さんでした。前回同様、彼の真摯にご自分と向き合う詩に感銘を受けました。

さて、今回の題材『生きる』とは、まさにこのコロナ禍で日本のみならず世界中の人々が直面しているワードでは無いでしょうか。今、人類は障がいの有る無いに関わらず、全ての人々が等しく『生きる』ことと真剣に向き合い悩み葛藤しています。『生きる』は、コロナ禍で大きく価値観が変わる時代が変わることのない喜びや葛藤がわかりやすい言葉に込められた作品だと思いました。

かけがえのない経験と感動を与えてくれる

ふれコンは私の音楽の原点です。

ふれコンに関わるすべての皆様に感謝します。

